

京都産業大学の特色ある取り組み①

「低単位・低意欲の学生層向けキャリア教育科目」に事務職員が参画する制度と意義

— ファシリテータとして多様な学生と向き合うとはどういうことか —

京都産業大学 共通教育推進機構 中西 勝彦
京都産業大学 学長室 藤原めぐみ



はじめに

京都産業大学で開講しているキャリア形成支援教育科目「キャリア・リーダーデザインI（以下、本科目）」は、対象とする学生を低単位・低意欲の学生層に絞り込んでいる点、授業に事務職員や先輩学生、学外専門職者も参画し、ファシリテーションの考えに基づく支援型教育を展開している点の二点が特徴として挙げられる。

本稿では、科目全体のコーディネートを担当する中西が、本科目の概要と事務職員がファシリテータとして授業運営に参画する体制について前段で紹介する。後段では、二〇一四年度の春と秋学期の二期にわたり職員ファシリテータとして授業運営に参画した事務職員の藤原が、自らの体験を通して得られた知見を報告する。

「キャリア・リーダーデザイン」の概要

本科目は、二〇〇六年度の開講以来、一セ

メスター完結の二単位科目として春・秋学期とも開講しており、二〇一四年度秋学期までの計一八期の総受講生数は一七八五名である。主たる対象は、大学生活や勉学への意欲が低い学生としているが、もちろんそれ以外の学生も受講できる。学部が定める制限登録単位数を超えての履修が可能であるため、低単位の状態を自認する学生が多く受講している。授業は、毎学期約一〇〇名の受講生を一五〜二五名の少人数クラスに分けて、隔週で水曜日三・四限に開講している。（うち五コマは合宿授業として実施。）

本科目の目的は、受講生が大学生活や将来に対するモチベーションを再発見することである。すなわち、①授業で出会う様々な他者と信頼関係を構築し、多様な価値観の存在に気づく、②自らの現在の状態（理想的な大学生像を体現できていない自分、低単位の状態にある自分）を俯瞰する視点を獲得する、③①と②を統合し、自らの生き方に選択の余地があることを知る、④現在の自身の状態を踏

まえたうえで、次に向けての一步を踏み出すこととする、以上四つのステップを受講生が経ることを想定している。

なお、本科目では、教育効果に関する学術的なエビデンスの蓄積を行っている。とりわけ鬼塚・中西（二〇一四）では、授業での対話体験を通して、自らの価値観や人間関係が閉塞状態にあることに、受講生自身が気づいたことが明らかにされた。ここで言う「対話」とは、価値観の衝突が起きた際、それを一旦保留しながら摺り合わせを試みる、他者および自己とのやり取り、といった意味である。

支援型教育を支える ファシリテータの存在

本科目では「低単位・低意欲の状態にある学生」に対して、ファシリテーションの考え方に基づく、徹底した支援型教育を行っている。ここで言う支援型教育とは、運営側の価値観を一方的に押し付ける指導的な教育とは

違い、受講生を見守りながら彼らの意思や状態、主体性を尊重し、授業内に「安心して対話ができる場」を創出する教育のことを指す。そのような支援型教育を実現するため、本科目には教員、事務職員、先輩学生、学外専門職者の四者がファシリテータとして、各クラス三〜五名のチームを組んで授業運営に携わっている。

ファシリテータのうち、事務職員は「ファシリテーション実践研修」という人材育成の一環として本科目に参画している。毎学期、主に公募によって参加者を募っており、自らの所属に関係なく応募することができる。これまでの延べ参画人数は八三名を数える。参画者は事前に担当教員から授業の概要とファシリテーションに関するレクチャーを受け、他のファシリテータと事前に打合せをした上で授業に参画する。職員ファシリテータの役割は、①受講生の様子を見守りながらクラス内に安心感を創り出す、②グループワーク等の進行をサポートする、③身近な職業人として自らの生き方やキャリア観を受講生に提示する、の三つである。

これまでの参画者からは、「自分の仕事に対する意欲が向上した」や「普段は接することのない」多様な層の学生と触れ合うことができた」「ファシリテーションを別の現場で活かしている」などの所感が寄せられている。

学生の多様性に触れる

— 職員ファシリテータの役割 —

「大学職員が学生の成長をサポートすると

はどういうことなのか?」「四年間で大学を卒業し、一流企業に就職することが学生達にとって本当に歩むべき道なのか?」「明るく、元気で素直な学生だけが、社会に求められる人材なのか?」

大学に奉職して以来、このような疑問が私の頭の中を駆け巡っていた。そして、それらの問いと真正面から向き合うことになったのが、本科目での職員ファシリテータ体験であった。

担当教員らと協働し、約二〇名のクラス運営に私はスタッフの一員として携わった。学生の成長を支える一人として、学生の気持ちに寄り添いながらサポートすることを目標とした。ファシリテータとしての私の主な役割は、授業内で学生を見守り、時として共にワークに参加し、「対話」を支援することであった。授業中に学生と接する中で、様々なことを考え悩みながらも、自分なりの言葉で自らの生き方を導き出そうとする学生の姿を見ることができた。

当初私は、当該科目の対象者は低単位・低意欲の学生であることから、彼・彼女らが大学生活に対して消極的であるという偏った見方をしていた。しかしながら、目の前にいる学生達からは、部活動に熱心に取り組む姿や人見知りの性格を変えようと努力している姿勢、理想と現実の狭間で葛藤している様子が見受けられた。皆形は違えど、自分と誠実に向き合っている様子が窺え、私自身も学生時代を思い出し、彼らの悩みに自分自身を重ね合わせていた。教育現場において、学生の多様性に触れることは、極めて基本的でありながらおろそかにされがちな姿勢であると痛感

した。

私の変化とこれから

一年間の職員ファシリテータの経験を通して私に変化したことは、学生支援に対する心がけである。学生と接する際、立場を重視した関係で振る舞うだけでなく、対等に対話をしながらか、相手の価値観や意見を尊重することが必要だと実感した。難波（二〇一四）が「お互いの価値観や存在を尊重することを知って生きているのと、ただ生きているのは違う」と記すように、まずは相手の立場に身を置き、自身の生き方・価値観と照らし合わせる行為が、人の成長を支援する一歩となる。

職員は、教員に比べて授業で学生と関わる機会が少ない。しかしながら職員は教員と同じような肌感覚で、在籍学生の気持ちや実態を把握する必要があるだろう。溝上（二〇〇四）が述べているように、学生を取り巻く環境は変化し続けている。学生は大学に何を求めているのか、ニーズに応えるための職員の役割は何なのか、ファシリテータとして学んだ対話が問いを解決する糸口になるかもしれない。

【参考文献】

鬼塚 哲郎・中西 勝彦（二〇一四）『京都産業大学 高等教育フォーラム第四号』（編）高等教育フォーラム編集委員会
難波 佳哲（二〇一四）「ファシリテータは何をしているのか?」（編）西村 佳哲「かわり方の学び方ワークショップとファシリテーションの現場から」筑摩書房
溝上 慎一（二〇〇四）『現代大学生論—ユニバーサルシティ・ブルーの風に揺れる』日本放送出版協会